

ベトナム、タンロン皇城における日本の陶磁器

ブイー・ミン・チー

はじめに

現在の首都ハノイの中心に位置するタンロン城遺跡は、10世紀を跨いで存在した歴史あるダイビエット国最大の首都でもあり、タンロン古都の皇帝宮の中心地にある一番重要な部分である。

この遺跡エリアでは2002～2009年の間に、ベトナムの考古学者が発掘調査を行ったが、建物・王宮・楼閣の基礎となった豊富で多様な痕跡と多くの王朝の遺物が発見された。それらは、同地に積み重なるように栄えた、ダイラー王朝（7世紀～9世紀）から、ディン・ティエンレー王朝（10世紀）、リー王朝（1010～1225年）、トラン王朝（1225～1400年）、レー王朝（1428～1788年）までの遺跡であった。

考古学者による遺跡エリアでの重要な発見は、用具や道具などの各種発掘を通じて、建築・装飾芸術・都市景観計画・皇宮の生活など、多くの分野にまたがるタンロン城研究の歴史に新たなページを開いた。

その時からタンロン城の歴史の秘密が明らかにされ始め、その中には王宮の日常生活で使われていた陶器も含まれていた。特に注目すべきは、ベトナム陶器以外に中国や日本、西アジアの陶器が数多く発見されたことである。これによって、タンロンと南アジア、北東アジアという偉大な文明との何世紀にもわたる交流が生き生きと映し出されたのである。その中でも、江戸時代の日本陶器の収集は、レー・チュン・フン時代（17世紀）におけるタンロンと日本の交流を示す典型的な証拠である。

これまでに、ベトナムで肥前陶器が発見された場所は全部で11カ所ある。居住区の遺跡ではチャンティエン、タンロン（ハノイ）、チューダウ、ホプレー（ハイズオン省）、商業港の遺跡ではフォーヒエン（フンイエン省）、タンハー（フエ）、ホイアン（ダナン省）、ヌオクマン（クイニョン省）、墓地の遺跡ではムオン（ホアビン省）、ダイラン（ラムドン省）、沖合いの島の遺跡ではコンダオ（キエンザン省）がある。

ベトナムおよび東南アジア、世界各国において肥前陶器がたくさん発見されたということは、17世紀における日本の国際貿易ネットワークへの重要な貢献を示している。

特に、タンロン城遺跡のような重要な遺跡エリアでの発見は、当時、ダイビエットの王が王宮での饗宴のために購入した、あるいは発注した陶器の品質をより明らかにしてくれている。

1. タンロン城遺跡での日本陶器の発見

タンロン城遺跡では建造物の遺跡以外に、陶器など多くの貴重な遺物も発見された。その中には、王と王室の用具という高級な品物も多く含まれている。7世紀から19世紀までのベトナム陶器以外では、7世紀から19世紀までの中国陶器、9世紀から10世紀の西アジア陶器、14世紀の韓国陶器や17世紀の日本陶器も数多く発見された。

日本陶器は肥前焼、あるいは伊万里や有田の名称で有名な焼物である。備前は昔の肥前国の重要な陶器生産の中心地であり、伊万里と有田は現在の佐賀県と長崎県の一地域で、日本の九州の北西部に位置する。

タンロン城遺跡で見つかった肥前陶器には、主にホワイトセラミックと色絵の2種類がある。ホワイトセラミックとは釉薬の下にコバルトブルーを着色する工法(専門用語では青白陶器と呼ぶ)で、色絵とは釉薬の上に着色する工法である。なかでも、青白陶器のほうが多い。

1.1. 青白陶器

青白陶器は主に有名な陶芸窯のある有田で生産される。これらの陶芸窯で焼かれる製品は元来主に、中国で非常に人気を博していた青白陶器の中国国内市場の需要を満たすためのものだった。しかし、1644年以降、東南アジアやヨーロッパの市場では中国陶器が不足してきたため、これらの陶芸の窯元はすぐさまそのチャンスをとらえて輸出用の青白陶器を生産することにしたのである。

ベトナムおよび東南アジア諸国の考古学的遺跡からは、日本の輸出用の青白陶器がたくさん見ついている。特に、タンロン城遺跡ではそれが顕著だった。しかし、まだ分類と整理の途中なので、現時点では本遺跡エリアで見つかった日本陶器の種類および数量について正確な最終データを出すことはできない。しかし、2006年から2009年までに見つかった379の標本と363の断片に関する概要分類データによると、同地で発掘された日本の青白陶器は主に五種類に分けられるようだ。それは鉢・皿・碗・デカンターと小瓶だが、鉢と皿が一番多い。

1.1.1. 鉢

様々なサイズと装飾模様のある鉢が見つかったことは、当時のタンロン王宮の豊かな使用需要を表している。しかし、設計と技法の観点から見ると、これらの鉢には非常に類似した点があることがわかった。すべて小鉢で、口はストレート、縁が湾曲し、内側が深く高台は小さくて低い。釉薬は乳白色や青白で、表面は中国陶器のような輝かしい白ではない。特に注目すべき点としては、これらの鉢にはクラックの模様と柔らかい骨材が使われており、前期のレー王朝におけるベトナム陶器と

同じであるということだ。鉢には釉薬の下に青色の模様が描かれており、一般的な絵柄としては竜・雲・フェニックス・ライオン・花・葉・風景および漢字がある。この装飾模様から、鉢は以下のような、八つのグループに分けられる。

(a) 竜の描画鉢

東洋の概念によると、竜の描画鉢は装飾模様の特色性と貴重な象徴値で常に価値のあるものだと考えられていた。タンロン城遺跡では135の標本と245の断片が見つまっている。これらの鉢のレイアウトと表現スタイルは非常に多様で、主に以下のような三つのタイプに分けられる。

まず第一に、日本風の竜と雲を定型に描いた鉢。1650年から1660年の間の早期に、ベトナムと東南アジア諸国に輸出された肥前陶器の典型的なものである。鉢の外形は短く湾曲し、頭の小さい尾を葉の形に広げた2匹の竜が飾られている。内側には、雲の中に隠れている竜頭を描いたり、波紋や水面上に跳ね上がる魚を描いたりしている。竜および雲と波紋の模様は非常にシンプルかつ雄大で、高度な様式化を示し、日本の青白陶芸の独自性を映し出している。

第二に、中国風の竜と雲を描いた鉢。この種の鉢の品質は前述の竜の描画鉢より遥かに優れている。釉薬はきらきらと白く、模様は濃紺だが、その色は鮮やかである。鉢の外縁には2匹の竜と火の雲を描画し、内側にも円の中に丸く収まった竜が描かれている。描画は非常に精密で、竜のそれぞれの足（3または4）をはっきりと描いている。この模様のスタイルとレイアウトは、中国の明時代の陶器からの影響を明確に示していると同時に、日本の青白陶器技法の急速な進歩をも示している。特に注目すべき点は、鉢の底面に常に明時代の王の年号として「大明成年製」と記していることである。素人目で見ただけでは、つまり、釉薬や骨材、特に陶芸家の独自の竜描画スタイルについて造詣が深くないと、中国陶器と区別しにくい。

第三に、円の中に竜と「壽（寿）」の文字を描いた鉢。竜が円の中に丸く収まり、その周りに簡素なスタイルで「壽」の文字を描くという独自性および創造性に富んだレイアウトは美的感覚に訴えかけると同時に、深い思想をも含んでいるため、この商品を高級なものとし、東南アジア市場に大量に普及させた。「壽」の文字を使って独立の装飾模様にすること、または竜・風景・人物とを組み合わせることは、中国の明時代の陶器ではかなり一般的であり、東南アジア市場への重要な輸出品に見られた特徴であったが、肥前陶器にもこの装飾模様が見られる。新たな雰囲気を持ってはいても、中国陶器の伝統的な要素が反映されている。

(b) ライオンの描画鉢

本遺跡エリアでは竜を描いた鉢以外に、円の中にライオン、周りに花柄、内側に類似の花柄を描画した高級な鉢も発見された。その色付けは日本陶器の特徴である。これらの鉢の中には、つる植物の花柄とライオンの姿のものもあり、その表現は類

似の中国陶器を連想させる。

(c) フェニックスの描画鉢

フェニックスを描いた鉢は、デザインとスタイルが、ベトナムや地域内の他の諸国の商業港跡、居住地跡や古墓およびタンロン城遺跡で見つかった鉢のものと同様である。この発見は、当時の東南アジア市場におけるフェニックス描画鉢の普及率と人気を示している。鉢の外縁には両翼を広げている二対のフェニックスを描き、描画はリベラルだが、定型である。内側には波紋や水面上に飛び跳ねる魚を描いており、スタイルが上述した竜と波紋を描画した鉢と同じである。

その他の遺跡エリアでも、内側に独自のスタイルでフェニックスを描いた貴重な鉢の標本が7点発見されている。これらの鉢は従来の陶器よりも非常に優れている。多くの場合は、鉢の外縁に山水風景・花・葉と波のように渦巻く大雲が描かれている。描画は柔軟で濃淡に富み、所々に小さな描画も盛り込まれている。特に、近景や遠景の山の頂上を飛んでいるフェニックスの鮮やかな表現などは、この模様を熟達した陶芸家でないと不可能だったことを示している。

(d) オンドリの描画鉢

現在の資料によると、ここに述べるオンドリを描いた鉢はタンロン城遺跡のみで見つかっている。鉢の外縁には、非常に特殊な背景の中に3羽のオンドリと石山の横にある花と草葉の風景が描かれている。精密に描画され、現実性に富んでいる。3羽のオンドリは異なる姿勢で表現され、その中の2羽は争っていて、彼らの頭には「夫」という文字が見える。もう1羽は別の方向へ向かっている。この図柄に込められた古代の日本人の観念（象徴の意味）については引き続き調査する必要があるが、オンドリや花の描画の技法は完璧とってよい。

(e) 風景の描画鉢

竜・フェニックス・ライオンを描画した鉢以外に、様々なスタイルで風景を描いた鉢が発見されたことは、当時のタンロン王宮で使用された肥前陶器の多様性を映し出している。その中で一番数が多いのは、船・海・山、建物や木々に関連した風景を描いた鉢である。代表的なのは航海と海の風景、あるいは石山の風景であり、描画スタイルが非常に大胆で印象的である。これらの鉢は品質が悪く、釉薬も白灰でざらざらしており、模様が濃紺である。品質がより良く、装飾模様も派手な鉢は、建物や石山、または港の風景を描画した鉢で、遠近法で表現されており現実性に富んでいる。

前述した鉢のほか、非常に熟練した技術で松を描画した鉢の断片も発見されている。木や模様を表すスタイルは、明時代の景德鎮陶芸の窯での描き方が輸入されたことを明確に表している。

(f) 花の描画鉢

かなり多くのレイアウトと装飾模様がある。代表的なのは円の中に花を描いたものであるが、さらに特徴的なのは鮮やかなブルドットを独自の青点で描いた鉢である。それは肥前陶器の独自性を持っている。これらの鉢には主にダークホワイトのクラックの模様があり、内側には絶妙な間隔で小花の枝が描かれている。底面に「宣徳年制」と記された標本がいくつもある。

他に、肥前陶器の特性を持っているユニークなものに、羽根車形に菊花を描いた鉢がある。縁には常に2、3の大きな菊を描き、花びらを羽根車のように広げて本体を包み込んでいる。周りのスペースは草と小雄蕊^{おしべ}で装飾されている。内側には広い円の中に小さな花や葉の枝を描き、底面には手書きで年号「宣明年制」または「宣徳年制」と薄く書かれているが非常に読みにくい。

上記の二つのタイプのほかに、本遺跡エリアでは菊や他の花模様で装飾された高級な鉢もたくさん見つかっている。この模様のモチーフとレイアウトは二つの方法で表現されている。まずは枝やつる植物で横線の水平レイアウトを描くことである。第二は、花枝を本体に沿ったフレーム内で対称に描いて、他の模様と交互に組み合わせた鮮やかな装飾ブロックを作り出すことである。内側には多くの場合、小さな花の枝や蓮の花または桃を描き、底面に年号「大明成化年制」と記された標本がいくつもある。

(g) 枝の描画鉢

枝を描画した鉢はあまり多くはないが、すべて高品質である。素材が丈夫で釉薬はダークホワイト、かなりさらさらとしている。外縁には日本の特徴を表す紅葉の枝が描かれ、内側にはシンビジウムまたは小さい花の枝を描き、底面には上記の鉢と同じ年号が記された標本がいくつもある。

(h) 漢字の描画鉢

タンロン城遺跡で発見された日本の青白陶器の相違点と興味深い点は、内側に漢字を描いた鉢があったことである。漢字を使って独自の装飾を作り出し、人生の理念または祝福のメッセージを贈っている。例えば、「福」（祝福）、「寿」（還暦を祝う）、「恵」（恵の祝い）など、中国陶器には非常に普及している。ここで見つかった日本陶器の標本の中にも、内側に大きなつる植物の葉の紋と漢字を描いた鉢がある。最も注目すべきものは、鉢の内側に「雨香齋」、底面に「仁庖」と古代の漢字で記された鉢である。ラムドン古墓の非公式な調査で見つかった肥前陶器の標本には、内側に漢字を描いた陶器も見られたが、年号「大明成化年制」と記されている。これは注目すべきケースだと思われる。

1.1.2. 皿

様々なサイズと装飾模様のある皿の出現は、当時のタンロン王宮での需要を示している。

オランダ東インド会社（VOC）の記録から、1676年にレー・フィ・トン王が台湾の商船から日本陶器を1万7720枚買ったことがわかった。その中には、7000枚の小皿と10枚の大皿が含まれる。この情報はほんの一部しか映し出してはいないが、タンロン王宮が以下の考古学的発見の裏付ける通りに多くの日本陶器を購入していたことを示している。

初期の統計によると、タンロン城遺跡では小皿と大皿を含めて191の標本と、35の断片が発見されている。その中で特に多いのが内側の深い小皿で、品質も装飾模様も多様である。大皿の数量は少ない（8標本）が、すべてが高級品でデザインと装飾模様が非常に美しい。

(a) 小皿

小皿には様々なサイズがあり、模様は内側に限られている。この模様は主に竜・雲・フェニックスと漢字、ウサギと風景、桃・菊、花と風景である。

・竜の描画皿

これらの皿は小皿の中で一番小さい（口の直径は10cm～11.8cm）が、高級品で、内側は竜と雲で飾られている。縁には2匹の竜を時計周りに描き、内側には丸くなった竜を描き、周りには非常に強風の際に見られる雲紋が描かれている。この皿での竜の形は、上述した竜と波紋を描いた鉢と似ている。注目すべき特徴として、竜頭と竜尾の描き方が日本の陶芸の独自性を示していることが挙げられる。底面に年号「大明成化年制」と記された標本がいくつもある。

・フェニックスと日本語の文字が描かれた皿

1650年から1660年の間にベトナムと東南アジア市場に輸出された低品質の陶器の典型ともいえる皿であり、上述した竜と波紋を描いた鉢と同じ時代のものである。内側が広く、縁が湾曲しており、口が直線的に斜めで、作りが太く、釉薬が乳白色やグレーで、模様は主に内側に描かれている。縁には時計周りで飛ぶ2,3のフェニックスを描き、内側には日や月を描いているが、日本の言葉の方が多く描かれている。

このグループのもう一つのタイプは、フェニックスと「壽（寿）」の文字を描いた皿である。より良い品質を持ち、エナメルが明るい白で、エナメル色も明るいブルーである。模様のレイアウトは明時代の陶器見本からコピーしたことを示している。

・菊の描画皿

本遺跡エリアでは、前述のウサギを描いた皿と材料およびスタイルが同じで、定型的に菊を描いた皿も見つかっている。枝が曲がり、花の形が濃紺の丸で非常に簡単に表されている。品質とそれぞれの模様の技法から、これらの皿が1630年から1650年の間の早い段階に作られたことがわかっている。

それ以外に、より良い品質で内側に現実的スタイルで菊を描いた多くの皿は、そのデザインとレイアウトから、上記の定型的に菊を描いた皿から発展・確立されたものと思われる。非常に豊富な量が発見されている。内側には、多くの場合、咲いている丸い花が三つ描かれ周りには3匹の魚が連なって泳いでおり、外縁は三つの小枝で飾られている。なかには幾何学的な紋だけであったり、プレーンで模様がなにもないものもある。

ここで注目すべき点は、きわめて特殊な菊を描いた皿も存在しているということである。内側にはコインのように丸い小菊だけを描き、葉や枝がまったくない。外縁には青い糸と小枝が描かれている。

・花の描画皿

小皿の一種だが、品質と装飾模様はより豊かである。草むらの花、秋月の風景と菊、つる植物と菊、蓮の花や花王の茂みなど、鮮やかに表現された模様が数多くある。その中で特に注目すべき点は、花と蓮の花びらで八つの武器を描き、内側には石山・花・草、鳥または昆虫の風景を描いて、景德鎮の陶芸窯のスタイルをほとんどそのまま真似ていることである。

・風景の描画皿

風景を描いた小皿はまだ多く発見されていないが、非常に注意すべき標本である。これらは高級品であり、内側には石山の横にいる鳥や枝にとまっている鳥を鮮やかに描いており、非常に芸術的である。それ以外では、外側に菊と風景を描き、内側に山と空・雲を独特の表現で描いた皿もある。

(b) 大皿

現在の遺跡エリアで収集された大皿はまだ少ないが、これらは貴重で高品質な陶器の標本である。形は基本的には2種類あり、階段状の本体と円形で湾曲した本体とがある。数が多いのは階段状の本体の方である。装飾模様は非常に繊細で洗練された技法で描画され、高い技術性が感じられる。また、「クラークのスタイル」で花と八つの武器の模様を描き、内側には石山の風景、花・草と昆虫を描いている。中国陶器の影響を受けた皿以外の残りの大部分は、主に山水画と花を描いた皿である。ホイアン（ダナン省）、タンハー（フエ）、ヌオクマン（クイニョン省）など、ベトナム中部にある貿易港跡でも、同じタイプの大皿以外に上記の「クラークのスタ

イル」で描かれた皿も見つかったが、その飾りはフェニックスだった。風景を描いた高級な皿は、唯一タンロン城遺跡で見つかったものだけである。

残念なことに、これらの皿のほとんどは小さな断片でしか発見されていないため、形と装飾模様の完全な美しさを見出すのが非常に難しい。しかし、東京の財団法人戸栗美術館、および九州陶器博物館に所蔵されている有名な皿のコレクションとの直接的な比較研究を通じて、タンロン城遺跡から発掘された断片の中に類似した皿があることがわかった。この比較研究から、古代のタンロン王宮で使用された大皿のグレードと上品さが明確に想定できるようになったのである。

1.1.3. 碗

ベトナムと東南アジア諸国で発見された日本陶器についての報告の中には、2007年に清水菜穂がビエンチャン（ラオス）で発見した碗の断片を除いて、お茶やお酒を飲むのに使われた小碗の発見情報がないようである。しかし、上記の VOC の記録には、レー・フィ・トン王が1676年に台湾の商船から買った日本陶器の中に1000枚の飲料用の小碗と200枚の茶碗があったと記されている。この手がかりから、我々はレー・フィ・トン王が買った碗の行方を見つけようと長年にわたって比較研究を進めてきた。そして、材料の特徴・釉薬・装飾模様の研究を通じて初めて日本の碗が確認された。しかし、見つかった碗の数はまだ多くはない。花と風景を描いた青白碗の5標本と9断片しか見つかっていない。

花を描いた碗は高台が小さく、本体が斜めに湾曲しており、口がストレートに広がっている。本体の周りには定型化された技法で三つの菊の枝を描いており、模様の表現が中国陶器とは明確に異なっている。

風景を描いた碗は花や葉を描いた碗よりやや大きく、高台が広くて本体が真っ直ぐ斜めになっており、口はやや外へ広がっている。周りには建物や山と雲の風景が日本独自のスタイルで描かれている。

上記の両碗も高級なもので、ここで発掘された中国の碗よりも美しい。そして、年代に関して述べると、これらの碗は約1670年から1680年の間に生産されたようである。というのも、前述したように、台湾の船が日本から陶器を持ってトンキンへ立ち寄り王に販売したが、その時期のものに該当する可能性があるからだ。

1.1.4. デカンター

碗と一緒に、白釉の上に青色を着色した日本独特のデカンターの三つの断片が初めて発見されている。このタイプは非公式な発掘調査の際にホアビン省のムオン墓跡で発見された。比較研究から、タンロンで見つかった容器の断片はデカンター類に属することがわかった。ニンニクの形状をしており、本体はスリムで長いですが首が小さく、高台が広い。周りには風景や花が描かれている。タンロンでダイビエット王が購入した日本陶器についての記録には、デカンターは記されていない。各種容

器についてだけは記録してあるが、おそらくそこに書かれている容器の中に酒を保管するためのデカンターも含まれていたであろう。

1.1.5. 小箱

上記の調査で発掘された陶器以外に、タンロン遺跡では白釉の上に青色を着色した小箱の断片も見つかっている。おそらく宝石箱であろう。蓋付きの小箱であり、デザインは明時代の箱の影響を受けたことを示している。しかし、蓋の上表面に菊の葉を描き、境界線を太い線で色付けたり模様をカエルの形にしたりするのは肥前陶器の独自のスタイルである。

1.2. 釉薬の上に多くの色を着色した陶器

考古学的な遺跡で発見された肥前陶器の標本から、青白陶器が東南アジアの多くの国で好まれた輸入品であったことがわかる。しかし、実際には、日本は青白陶器のほかに、釉薬の上に着色した高級な陶器も輸出していた。ただし、数量が欧州市場に比べて限定されていた。それでも、これまでの研究から得た情報の限りでは、研究者はベトナム市場における日本の着色陶器の出現を知らなかったようである。1993年にタンハー商業港（フエ）とヌオクマン（クイニョン省）を調査した時に、釉薬の上に着色した大皿の断片が発見された。その中に、鹿と紅葉を青・黄・赤の釉薬で華やかに装飾した断片があった。その後、ホアビン省の古代ムオンの墓から発掘した陶器標本を研究したが、その際、肥前陶器の中に、釉薬の上に着色した特殊な陶器も見つけた。内側にはつる植物の花が、真ん中にはリスが描かれ、底面には漢字二文字で「萬歴」と描かれていた。これらの証拠は青白陶器の場合と同じであり、これにより、ベトナム市場における着色した高級な日本陶器の存在をはっきりと確認することができた。しかし、非公式の発掘とはいえ、ハノイとホーチミン市の個人収集物の中に日本の着色した陶器が存在するという事は、それら見つかった考古学史料より何倍もの多くの貴重な陶器がベトナムに実際に輸入されたことを示している。

タンロン城遺跡できわめて独自のスタイルで描かれた鉢が初めて見つけられた。外側はブルーエナメルでカバーされ、その上からつる植物の菊模様が黄色で着色されている。内側は白エナメルで、縁には竜の形、内側の真ん中では釉薬の下に小さい花枝が青色で着色されている。残念なのは、黄色がぼやけていて、あいまいな画しか残っておらず、斜めからの光で見たときしか模様が認識できないことである。そして、この斜めからの光で見ると、つる植物の菊模様はかなり柔らかく洗練された画であることがわかった。

1.3. 芸術の特長と年号

日本の肥前陶器、特に青白陶器は装飾とデザインにおいて中国陶器の影響を大き

く受けている。模様のレイアウトとモチーフには明時代の終わり頃の特徴が見られ、輸出用の肥前陶器の装飾芸術に断続的なひらめきを与えた。多くの研究者は日本陶器と中国陶器の区別が難しいことを認めている。理由は、両者の間にかなり多くの類似点があることだが、特に多くの日本陶器の底面に明王朝の王の年号が記されているからである。

タンロン城遺跡で発見された碑文のある肥前陶器標本についての集計から、次のような五つの明王朝の王の年号を記述する方法が存在することがわかった。それは大明、大明成化年制、宣明年制、宣徳年制、大明嘉靖年制である。

デザインの類似性、特に明王朝の王の年号または中国の有名な陶芸窯の名前を記載するというやり方は、中国陶器が不足していた状況の中で、日本の陶工が国内市場の需要に応えるために積極的に中国陶器の偽造をしたり中国陶器の影響力を利用したりして、欧州やアメリカ、特に東南アジアの活発な市場で肥前陶器を販売していたことを示している。彼らは、中国陶器を見たり肥前陶器生産の見本としたりして、中国陶器の特徴をしっかりと把握するよう努めた。非凡で絶妙な表現のため、優秀な中国陶器の研究者でも時には判別するのが非常に難しいと感じることさえある。

ベトナム、ラオス、タイ、カンボジア、マレーシア、インドネシア、フィリピンの多くの考古学的な遺跡では、輸出用の肥前陶器が発掘された。しかし、資料不足かつ上記に述べた肥前陶器の特殊な事情から、これらの陶器を間違えて中国陶器としてしまったケースも少なくない。

しかし、深く系統的に研究し中国陶器についての知識を得ると、日本の肥前陶器の年号の記し方には多くの注目すべき点のあることが見えてくる。まず、すべて明王朝の年号である。例えば、宣徳（1426～1435年）、成化（1465～1487年）、嘉靖（1522～1566年）というように、生産時点より数十年から数世紀前になるが、デザインと模様のスタイルは年号よりも遅い時代の特徴が見られる。第二に、字体と年号の漢字の記し方がしばしば不明瞭で、中国陶器のような標準的なものではない。多くの場合は、画の不足があったり不鮮明で読みにくい。中国陶器には、肥前陶器のように「大明」「宣明年制」または「大明成」という年号を書いたものが存在しない。常に「大明年制」「大明宣徳年制」または「宣徳年制」「大明成化年制」あるいは「成化年」という完全な年号が記されている。第三に、複数のケースで、二人の異なる王の年号を同じ製品に書いたというようにしくじりもある。ラムドン省で発掘された青白の鉢の断片の場合、内側には「大明成化年制」と記されているが、底面には「宣明年制」とある。

材料や釉薬、特に陶芸スタイルについてのさらに深い研究は、肥前陶器の陶工が中国陶器のパターンを単に模倣しただけでなく、古伊万里・柿右衛門・鍋島など、独自のスタイルも開発したことを知らしめる。上記、タンロン城遺跡で見つかった肥前陶器コレクションの分析結果は、肥前陶器も余所から取り入れた要素以外に、

菊・桜・紅葉など、日本の文化を鮮やかに表現するために、風景や花・葉にインスピレーションを求めていたことを示している。肥前陶器の内側の模様のモチーフは、古伊万里様式とは異なるニュアンスを伝えている。描き方が非常に印象的で感情豊かである。

タンロン王宮で使用された陶器の皿の中には、花群の菊を描いた小皿が多くある。これらの皿はベトナム北部の遺跡から見つかったのみのものである。装飾スタイルの違いと模様の豊富さは、菊が日本人に非常に愛されていたことを示している。この花は日本の精神文化生活の中で非常に重要な役割を果たしている。真ん丸の菊には全部で16の花びらがあり、太陽が輝いているように見える。日本人はそれを皇族のシンボルと国章として選んだ。

1.4. 窯の起源と年代

肥前陶器という名前は、タンロンの王宮で使用された日本陶器の起源をある程度明示している。肥前で集中的に生産され、そこには有田、伊万里、吉田、志田、鍋島、三川内、波佐見、浜という重要な陶芸窯がある。その中で、一番有名なのが有田であり、日本陶器の起源だと考えられている。

16世紀以前に日本は陶器生産技術を持っていなかったため、中国陶器の大部分を輸入しなければならなかった。しかし、1592～1598年の間に当時の日本の支配者であった関白豊臣秀吉（1536～1598年）は軍隊を朝鮮半島に送った。彼らは多くの朝鮮人を日本に連れてきた。その中には熟練した陶工もいた。李参平はその陶工の一人であり、武将鍋島直茂により肥前へ連れてこられた。李参平とその同僚は泉山で白磁鉞山を発見し、上白川天狗谷に陶器工房を設立した。それ以来、多くの陶芸窯が有田に出現し、朝鮮陶芸の技法に則った白釉薬の陶器と釉薬の上に青色で着色した陶器を生産することに特化して、日本の陶器の歴史に新たなページを加えた。有田はすぐに繁栄し、日本における初めての陶器生産地となった。これら陶芸窯の誕生の歴史は、江戸時代（1603～1868年）、正確には1610年に始まり、日本が国際陶器貿易市場に参入した後（1650年）急速に発展した。

出島貿易港（長崎県）からタンロン（当時はトンキンまたはダンゴアイ〔塘外〕とも呼ぶ）までの肥前陶器を載せた商船の旅については、時間軸に沿った記録が明確に残されており、タンロンへの陶器輸入が異なる時期にたびたび行われたことを示している。

トンキンへ初めて運ばれた品物についてだが、多くの資料には、1650年にヴィッテヴァルクというオランダの船によると記されている。その旅中、1650～1681年の間にオランダ・中国・台湾の35隻の船すべてが肥前陶器をトンキンへ輸送して販売した。そして、日本側の資料によると、1690年頃にタイとベトナムへの肥前陶器の輸出を停止したとある。

上記の資料から、タンロン城をはじめ、ベトナムに輸入された肥前陶器の年代の

確定がより容易になり、1650～1690年という年代測定は信頼性が高いと思われる。しかし、品質とスタイルに関する分析結果は、タンロン城で見つかった肥前陶器の中には、トンキンへ到着したヴィッテヴァルク船の時代よりもはるかに早い時代の陶器が存在することを示している。不均一な品質や様々な装飾スタイルの存在は、それらの陶器が異なる時期に異なる工房や陶芸窯で作られたことを物語っている。その中でも、低品質で不良な青釉薬のものはおそらく経験が乏しい早期に作られた可能性が高い。菊やウサギを定型的に描いた小皿と航海風景を描いた鉢は、この段階、つまり1630～1650年の間の年代に属すると確定される。これらも、タンロン城遺跡で発見された肥前陶器収集品の中では、一番早い年代のものとなる。

ここで、肥前陶器がトンキンへ初めて輸入されたのはいつか、という疑問が出てくる。

この疑問を検討するにあたっての重要な手掛かりは、ホアビン省のムオン族のディンバンキーの古墓に埋葬された肥前陶器の発見である。この墓に刻まれた碑文には、ディンバンキーが1582年に生まれ、1647年10月13日に66歳で死亡したとある。葬式は自宅で行われ、1650年2月22日に墓へ運ばれた、とはっきり記されている。見つかった15枚の陶器の中に、竜とフェニックスが描かれた肥前の鉢があった。この発見により、肥前陶器の年代が墓石の年代より前であること、あるいは少なくとも同じ時期であるということが正確にわかる。ヴィッテヴァルク船がトンキンへ品物を輸送した時期（1650年10月と正確に記録してある）は、ディンバンキーが古墓に埋葬された時期より数カ月も後である。つまり、トンキンに肥前陶器が輸入されたのは1650年より以前であったことを意味する。

ホアン・アイン・トゥアンがオランダ東インド会社（VOC）とイギリス（EIC）の保管所から集めた、外国の陶器をダンゴアイへ輸送する旅を描いた絵は、肥前陶器の輸入が非常に早い段階で始まったことを示している。この資料によると、1637年7月にGrol船（オランダ）が台湾からダンゴアイに85の未完成の高級な陶器の見本を運んだという。続いて1644年と1645年、1647年に台湾からダンゴアイに陶器商品を輸送する船があった。そのうち、1647年11月に同地に到着したヴィッテバルク船が鉢と皿を含む260の未完成な陶器を持ちこんだが、16ギルダー（オランダの通貨）という値であった。具体的な説明はないが、地域の背景から考えると、上記の陶器の生産地は中国と日本であると推定される。

多くの資料が示すように、日本の陶器生産と輸出の歴史の中でもう一つの重要な転換期だと考えられるのは1644年である。この時期、中国では明時代から清時代へ移行する時期にあたり、内戦が勃発していた。日本へもたらされる中国陶器の数が減少し、中国陶器が不足する事態が生じたため、肥前の陶芸窯は国内市場だけでなく東南アジアと他の地域の市場をも手に入れた。

山脇貞治郎の研究でも、肥前陶器が1640年からインドシナへ輸出され始め、1647年には中国の船によってタイを経由してカンボジアに運ばれた陶器があった

と確認されている。

様々な角度から分析すると、肥前陶器がダンゴアイに輸入されたのは1647年以前、遅くとも同じ時期だということがわかる。そして、陶器の品質とスタイルに関する比較研究、ならびに品物の辿った道筋の歴史背景と時間軸に沿った記録を考慮すると、肥前陶器がトンキンに輸入されたのは1645年であると思われる。

上記の分析の結果は重要で、科学の面にとっても有意義なものである。というのも、年代の確定がより容易で正確になるだけでなく、トンキンに輸入され、特定の時期にダイビエットの王が王宮で使うために購入したことも明示されたからである。その解析結果から、タンロン王宮で発掘された肥前陶器年代が詳細に分類され、主に次の四つの段階に分けられた。それは、①1630～1650年、②1650～1655年、③1660～1670年、④1670～1680年である。

2. タンロン王宮での日本陶器の役割

遺跡エリアで発掘されたベトナム陶器・中国陶器・日本陶器の大部分は、歴代王朝のタンロン王宮の生活の中で陶器が欠くことのできない重要な存在だったことを示している。タンロン王宮での生活で使われた陶器の使用法とそれぞれの役割についての歴史的な記録はないが、フエ（ベトナム）と北京（中国）で使われた陶器についての比較研究を通じて、日常生活から大行事・王の誕生・王妃就任式・王の戴冠式といった王と朝廷の饗宴まで、陶器が王宮の生活の中で欠かせないものであり、重要な役割を果たした小道具だということがわかった。しかも、陶器は、宗教的な施設での供物として、あるいは広くて豪華な部屋のある王宮のインテリア装飾品として王宮の優美さをさらに強調する目的で使用されていた。

遺跡エリアで多くのレーチュンフン王朝のベトナム陶器が発見されたことにより、17世紀のタンロン王宮では主に低品質の国産陶器を使い、特色のある陶器が少ないこと、全体的には城外の民衆が使う陶器と同じであったということが示された。これらの陶器は、フォプレー、カイ、ラオの陶芸窯（カムビン、ハイズオン省）、シッタダン陶芸窯（フォヒエン、フンイエン省）、バットトラン陶芸窯（ホン川のそば、現ハノイ）など、城の東に位置する民俗窯で生産された。

タンロン城遺跡で豊富に発見された中国陶器と日本陶器の収集品は、内戦があっても、タンロン王室が王宮生活に華やかな彩りを添えるために、国産陶器以外に中国と日本から大量の陶器を注文したり直接購入したりしていたことを示している。国産陶器と比べて、竜やフェニックスのモチーフや花のモチーフを描いた中国や日本製の陶器のグレードと品質の優位性は、これらの陶器が明らかに王と王室専用として使われたものであることを示している。

「ダイ・ビエット・クオク・トー」によると、レー・チュン・フン時代から、王室での陶器の使用には王朝の伝統という厳しい規制が存在していた。1661年に朝

廷は、「王専用の竜・フェニックスのモチーフや花のモチーフを描いた陶器の生産と販売を禁止する」という禁止令と、「用具の生産に関しては、一人一人の地位に応じて生産・販売しなければならない」、「学者、政府高官、村長、官僚の子どもや孫および普通の人々は国産の陶器を使用しなければならない」という御触れを発表している。

レー王とチン王が景德鎮の窯（中国）に発注して購入した陶器（ド・ス・キ・キエウと呼ぶ）の収集調査により、この時期、陶器のグレードや装飾模様および底面に記された年号を基準に、朝廷が王宮で貴重な陶器を使用・配置する際に非常に厳しい規制を敷いていたことがわかっている。

当時の記事と、1650年以前から1681年にかけてダンゴアイに輸入された陶器についての研究によって、タンロン朝廷が王宮で使うために大量の陶器を購入したことがわかった。豊富で多様なデザインと装飾模様のある瓶、ジャー、デカンター、鉢、皿、碗、きゅうすなど、多岐にわたる。

当時の記事や記録をまとめた結果および考古学的研究を通じて、タンロン王宮における肥前陶器の役割と機能についてかなり明確になった。それは次のような四つの用途に分けられる。

- ・ 飲料用：小さいガラス瓶または小さな取っ手が付いている細口の瓶
- ・ 茶器用：きゅうすまたはお茶を入れるためのポット、茶の湯の茶碗と小皿
- ・ 食器用：大・中・小の三サイズで多種のデザインと装飾模様がある鉢と皿
- ・ インテリア装飾用：主に細長い瓶

タンロン城遺跡で発掘された日本陶器の収集品は主に飲料用・食器・茶器であり、インテリア装飾用品はいまだ見つかっていない。しかし、本遺跡エリアで見つかった外国陶器についての研究と整理はまだ実施途中なので、今後、ここで述べた以外の肥前陶器についての多くの新しい発見が出てくるはずである。

特にVOC記録には、17世紀に日常生活で使用された一般的な陶器のほかに、タンロン王宮では茶の湯や茶会で多くの陶器が使われたことが記されている。これは非常に興味深い情報である。ファム・ディン・ホー（1768～1839年）は「ブー・チュエン・ツイ・ブット」に次のように書いている。

Enkh Amgalan Khan 時代（1662～1722年）以降、お茶の飲み方が変わった。大きい茶釜をやめて小さい茶釜に変更した。なぜかという、お茶をいれる時にきゅうすが小さいと味が薄くなりお茶を飲む時に本来の味がするからだ。ティーポットの口がストレートだと、水が詰まらない。皿が平らだと、碗が傾かない。炉がいっぱいでも穴が少ないと、木炭の火が熱くならない。湯沸しの内側がでこぼこで薄いと、早く沸騰する。このように茶卓は当初未完成だった

が、その後徐々に洗練されてきた。

ここで述べられたように、日本の茶の湯で使われる茶碗と小皿が初めて明確に記され、遺跡エリアで発見された陶器の収集を通じて実際に目の当たりにした。

遺跡エリアで発見された日本陶器の種類は VOC の記録と比べると少ないが、非常に重要な研究資料であり、レー王朝が当時のタンロン王宮で使用するために輸入・発注した事実を示す日本陶器の生きた証拠である。これらの陶器は用途によって様々な特徴を持つが、貴重な陶器が王室の生活の中で重要な役割を果たしていたと見なされる。

3. 結論

1. ホアンデュー通り 18 号の地下で見つかった考古学的発見は、タンロン城の宮殿がリー王朝以降の王によって建てられたことを明らかにした。このことから、ハノイ中心部に位置し、建都から 1000 年を迎えたタンロン古都の華麗な歴史はさらに皆からの注目を集めるようになった。

本遺跡エリアで各王朝の宮殿や楼閣の建築物と一緒に発見された各種ベトナム陶器・中国陶器・日本陶器・朝鮮陶器の発見は、歴史・文化・建築・芸術から王宮の生活まで、多くの分野での研究に新たな歴史のページを開いた。

2. タンロン城遺跡での肥前陶器の発見は、ダイビエットの王がタンロン宮殿で使用した日本陶器の種類・質・豊かさについて直感を与えるだけでなく、17 世紀におけるタンロンと日本との間の貿易の歴史を生き生きと伝える証拠でもある。これはベトナムの商業港でかなり活発に陶器が取引された時期である。中国や日本、オランダやその他の国の多くの船がタンロンへ立ち寄り、中国陶器や日本陶器を含む多くの品物を販売した。しかし、国際海上貿易の衰退により、この世紀の最後の数十年で西ヨーロッパの店舗が閉鎖に追い込まれ、ベトナムや東南アジアの市場への日本陶器の輸出の歴史は公式なピリオドを打つことになった。

3. すなわち、3 世紀以上を経て、ダイビエットへ輸出されタンロン王宮で使用された日本の肥前陶器についての謎が初めて明らかになった。これらの陶器の収集品は歴史の生き証人であり、明確で印象的なイメージは、17 世紀の日本とタンロンの交流関係を喚起させた。

そして、輸出用の陶器という観点から見ると、太宰府市（福岡県）で発見されたベトナム最古の陶器と元徳 2（1330 年）と記された木簡とを参照した際に、ダイビエットと日本の貿易関係はトラン王朝時代に確立されたことがわかった。その次代のレー王朝（1428～1527 年）、レー・チュンフン王朝（1592～1788 年）のベトナム陶器も日本の遺跡で多数発掘されている。この証拠は、両国間の貿易関係がかなり長い間存在してきたこと、消すことのできない歴史的な証拠がたくさんあるこ

とを生き生きと物語っている。

参考文献

- タン・テー・ビ 『17世紀、18世紀と19世紀初頭におけるベトナムの外国貿易』 履歴出版社、ハノイ、1961年
- Volker T. *Porcelain and the Dutch East India Company*. Leiden: E. J. Brill, 1971
- Toguri Museum of Art. *Japanese Ceramics in the Toguri Collection*. Ryohuso-Sha, 1988
- Yamawaki Teijirō. *The Export of Imari Ware by Chinese and Dutch Ships*, in Arita Chōshi Hensan Iinkai (ed.) *The History of Arita-cho Volume on Business*. Arita machi, 1988
- Hizen Wares Abroad*. The Kyushu Ceramic Museum, 1990
- ブイ・チミ・チ 「タンハー商業港研究の補足」 『考古学』 第2号、1993年、項80
- ブイ・チミ・チ 「タンハー商業港」 『過去及び現在のフエ』 第4号、1994年
- ブイ・チミ・チ、ファム・クオク・クアン 「ベトナムの考古学的な遺跡で発見された日本の肥前陶器」 『考古学』 第4号、1994年
- Gerald Davison. *The Handbook of Marks on Chinese Ceramics*. Putney London, 1994
- Earth and Fire. The Kyushu Ceramic Museum, 1996
- トン・チュン・ティン 「日越陶器の交換と売買状況（14世紀～20世紀）」 『歴史研究』 第3号、2000年、67～73頁
- ブイ・チミ・チ 『タンロン王宮とタンロン城遺跡での陶器の美』 文化情報出版社、ハノイ、2006年
- ブイ・チミ・チ *Vietnamese Ceramics in the Asian Maritime Trade in the Seventeenth Century, in Exchange of Material Culture Over the Sea: Contacts between Europe and East and Southeast Asia in the 16th–18th centuries*. Academia, Sinica, Taipei, Taiwan, 2007
- ブイ・チミ・チ *Gốm Nhật Bản trong Hoàng cung Thăng Long – Japanese Ceramics found in Thang Long Royal Palace* 社会科学出版社、ハノイ、2011
- トン・チュン・ティン、ブイ・チミ・チ 『タンロン—ハノイ、地下からの千年の歴史』 社会科学出版社、ハノイ、2010年
- ホアン・アイン・トアン 「東南アジアへ輸出されたダンゴアイ陶器、17世紀、資料と意識」 『歴史研究』 第11号、2007年
- Naho Shimizu. *Japanese Hizen Ceramics Recovered from the Old City of Vientiane*. 2010
- チャン・ディン・ソン 『レー——チン王朝（1533年～1788年）におけるベトナム風の陶器』 アート出版社、ホーチミン市、2010年